

映画上映「炭鉱（ヤマ）に生きる」と解説

日大生産工 教養・基礎系 田中直樹

1. はじめに

映画「炭鉱（ヤマ）に生きる」（文部科学省選定，文化庁支援）は，元炭鉱夫・山本作兵衛氏の炭坑画をベースにして，明治から大正，昭和に至る炭鉱の人々の生活を描いた作品である。山本作兵衛氏の描く炭鉱夫には，どこか清冽にして清廉なものを感じる。それがこの映画を製作する動機であった。彼が描く炭鉱夫たちの目の凛々しさに惚れたと言えるかもしれない。ところで，炭鉱で働いていた多くの方々を取材して感じたことがあり，取材の最初，一様に次の言葉が私たちに投げかけられた。

「炭鉱＝暗いイメージ，それをまた増幅させるのか。それは間違いだ。自分たちは全く違う・・・」炭鉱の社会そのものが歴史の暗部でもあるかのように語られてきた，そのことに対する憤怒が濺のように人々の心の中に溜まっているようだった。しかし，取材を重ねていくうちに，炭鉱に生きた人々に共通する意識が私たちの心を捉えていったのである。それは共同体という絆である。ある炭鉱夫は次のように言った。

「死という恐怖。それを常に身近に感じながら生きていくとき，最も重要なことは，仲間と『共に生きる』という意識であり意志である。」もしかしたら，その意識の絆から炭鉱社会独特の「人情」や「情愛」が醸成されていったのかもしれない。

かつて，宮本常一は「日本の近代において炭鉱だけが民俗学から取り残されてきた」と言及した。明治から昭和40年代まで，日本のエネルギーの基幹産業として日本経済を下支えしてきた炭鉱は石油の登場によっていつの間にか，人々から忘れ去られてしまった。そして，「炭鉱＝暗いイメージ」ということだけが一人歩きするように残って，誰一人炭鉱の人々の生活を知らない。まさに炭鉱社会は封印された世界のように扱われてきた歴史的側面がある。しかし，筑豊の地には，今こそ現代に生きる私たちが再認識しなければならない日本

人のアイデンティティーや共同体の香りが濃厚にただよっていた。

映画「炭鉱（ヤマ）に生きる」は，山本作兵衛氏が描く炭鉱の社会と，戦後の炭鉱社会で生きてきた人々の取材とが重なり合って進行している。そして，それらが織りなす世界からは，次のメッセージが明確に打ち出された。

「いつの時代も，無辜にして無垢なる民によってこの国は支えられてきたのである。」こんな思いの作品である。

2. 解説

（～ それぞれが皆，寄り添うようにヤマで生きてきた～）

山本作兵衛，明治 25 年生まれ。明治から昭和にかけて筑豊の炭鉱に生き続けた一人の炭鉱夫である。彼の名を後世に残したのは，自らの経験を描いた数百枚の炭鉱絵画だった。その一例を図 1 に示す。その独特の画風には，炭鉱という知られざる闇の世界が精緻に描写されており，合わせて炭鉱夫たちの日常を詩情豊かに映し出している。



図 1 山本作兵衛の炭鉱絵画の一例

この映画は，山本作兵衛の炭鉱絵画を基に，明治の勃興期から昭和の終焉まで筑豊の炭鉱に生きたある坑夫の生涯を物語っている。合わせて，炭鉱に生きた人々の生の証言を随所に組み入れるといった手法により，今まで製作された映像や書籍とは一線を画す新しいドキュメンタリー映画となっている。

山本作兵衛の世界，そして昭和に生きた坑夫た

The Life History of Coal Miners
by
Naoki TANAKA

ちの証言。それらは時に絡み合い微熱を発生し融合して行く。時代(とき)を超えて現代の私たちに訴えてくるのは、運命共同体の中で寄り添うように生きてきた人々の息づかいと体温であろうか。時として事故により多くの犠牲者を出す炭鉱社会では、私たちには想像がつかないほどの深い相互扶助の精神が育っていた。そこに日本人のアイデンティティーの原型を垣間見ようと映画が迫っていく。

二胡の名手、ジャー・パンファンの調べは静謐であるが力強く暖かい。また小沢昭一の語りには、近代日本の礎となった人々への鎮魂があり慈しみに満ちている。

わが国は、明治維新以降、一世紀余にわたって西欧をモデルとした近代化を追い求めてきた。明治政府が国是とした“富国強兵、殖産興業”はその中核を占めた。

日本人の生活様式も西洋文化の影響を受けて徐々に変化を遂げていった。『明治文化史』(渋沢敬三編、第12巻・生活、1954(昭和29)年刊)には、人々の生活の変化の実相、たとえば、衣服、生活、住居、交通、都市、村落等々について詳細に描写される。

柳田国男は『明治大正史 世相篇』(1931(昭和6)年刊)で、常民生活史の視点から、人々の生活の変化の主要なる推進力が何であったかを考察した。柳田は、「衣食住に対する民衆の感覚の変化(情動)を重視し、それを内側から捕らえることによって『民衆的近代』に向かう時代相を浮き上がらせるという方法を示した。たとえば、住居について次のような鋭い観察をしている。

住居を「板戸から紙窓へ」、さらに「ガラス窓へ」の発展で捕らえ、それが家の内部を細かく仕切ることが可能にさせ、結果として家長権の支配から個の空間を分離独立させていった内側からの近代化過程を情動の視点から描いて見せた(色川大吉『昭和史 世相篇』1990(平成2)年刊)。

当然ながら筑豊地域社会もこのような近代化の洗礼を受けることになる。

日本の近代化が始まる19世紀後半は、“鉄と石炭”の時代であった。この時代こそが、日本、そして筑豊を決定的に命運づけた。天然資源に恵まれないわが国において、唯一豊富に賦存していた“石炭”は時代の寵児として迎えられ、“鉄”と共に産業化に多大な貢献を果たしていく。

しかしながら、エネルギー産業としての国内石

炭の主役はせいぜい50～60年で、その後は石油にその座を譲ることになる。1950年代後半以降、エネルギー革命によって日本の石炭鉱業は崩壊の過程を辿り、そのスピードは年ごとに加速していった。皮肉にもそれは高度経済成長期と軸を一にしている。巨大な近代産業の崩壊は、わが国にとって初めての経験であったが、このことは産炭地域を長期にわたって疲弊させていくことになる。当該地域の未曾有の椿事は、諸問題を山積みさせたまま現代に至っている。

3. スタッフ、出演者一覧

映画「炭鉱(ヤマ)に生きる」に関係したスタッフ、出演者および協力した関係団体は、次のようである。

3.1 スタッフ

(1)監督：萩原吉弘、(2)原画：山本作兵衛、(3)製作指揮：住田望、(4)企画：田中直樹・小松原時夫、(5)監修：深町純亮・田中直樹、(6)プロデューサー：今関直哉、(7)撮影：住田望、(8)照明：小峯睦男、(9)VE：落合智成、(10)モーションコントロール：山下由晃・沼田京、(11)美術：関根章敦、(12)大道具：高瀬岩夫、(13)デジタルFX：渡部洋、(14)EED：久保田尚、(15)音響効果：小野弘典、(16)整音・MIX：滝澤修、(17)題字：阪野高光、(18)音楽：埜邑紀見男、(19)二胡演奏：賈鵬芳、(20)ナレーター：窪田等、(21)語り：小沢昭一、(22)助監督：滝口伸一、(23)撮影助手：神戸千木、(24)照明助手：石原裕一、(25)進行助手：大友伸吾、(26)宣伝：茶谷淳・海老原由紀・松寺園子、(27)デザイン：落合正夫

3.2 協力関係者および団体

(1)特別協力：山本照雄・田川市石炭資料館・九州大学石炭研究資料センター、(2)撮影協力：宮田町石炭記念館・株式会社麻生・片岡演劇道場・普光王寺・脇田温泉ホテル楠水閣・飯塚労働会館、(3)協力：飯塚市・田川市・穂波町教育委員会・宮田町教育委員会・稲築町教育委員会・桂川町教育委員会・王塚装飾古墳館・福岡県立筑豊工業高等学校・RKB毎日放送・西日本新聞社・毎日新聞社・朝日新聞社・新日本製鐵株式会社・株式会社東芝・市立岡谷蚕糸博物館・国立国会図書館

3.3 製作関係

製作：株式会社モンタージュ・株式会社メディアストリーミングシステムズ